

【陸上（高）領域授業研究会】

参加者：米子市17名 鳥取市2名 日野郡3名 東伯郡1名
オブザーバー：鳥取県小学校体育研究会 長谷川 誠一 顧問



○協議の柱

「類似の運動（アナログン）が、児童の主体的な学び（課題の焦点化、コツの習得、ポイントの体現化）に繋がる場になっていたか」

「『する』『見る』『支える』『知る』の見方、考え方の授業者の意図が感じられる授業展開であったか」

○成果

- ・課題（踏み切り、着地、助走）に合わせて類似の運動（アナログン）を取り入れた。それによって運動のポイントを意識させることやコツの習得に繋がった。
- ・支援の児童が手拍子をすることで走りに変化が見られた。
- ・本時の教師の言葉かけが、児童の支援の価値づけになっており、重要であると感じた。
- ・チーム活動の意図（チーム編成 運動技能の高位・中位・低位で混成）は、学習が進むにつれ、高位の児童より低位の児童の伸び率が高くなっていくことが予想される。そのため、単元全体を通して、低位の児童が自己有用感を味わえるのではと感じた。

○課題

- ・コツの言語化について、1つの表現では感覚が分かる児童とそうでない児童があることが予想される。教師の問い返しで多様な表現を引き出し、補うことが必要だと考える。
- ・ポイントやコツの伝え合いについて、児童の関わりのほとんどが称賛の声かけであった。見る視点がより明確な方が活発な話し合いになったのではないかと考える。
- ・ふり返り板の使い方はどうか。
 - ⇒話し合いをしながら友達の自己評価を向上修正できる場面があっても良い。
 - ⇒自己の変容を感じとるためには、足跡が残るシールを活用しても良い。教師の意図を反映させればよいと考える。
 - ⇒児童同士の多様な関わりのきっかけとして活用する場合もある。自己評価が低い友達に対して、向上させるために積極的に言葉かけをしたり、コツを伝える活動をしたり、積極的な関わりを促したい。